あすなろ物語

井上　靖

新潮文庫

う物語

定価240円

新潮文庫 草63 E

昭和三十三年十一月三十日 発行
昭和五十年一月三十日 三十三刷改版
昭和五十五年五月十五日 四十七刷

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社
© Yasushi Inoue 1958 Printed in Japan

新潮文庫

あすなろ物語

井上　靖著

新潮社版

1238

目次

深い深い雪の中で……七
寒月がかかれば……四
漲ろう水の面より……八〇
春の狐火……一一八
勝敗……一四
星の植民地……一七三
井上靖人と作品……福田宏年　二〇六
『あすなろ物語』について……亀井勝一郎　二二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

あすなろ物語

深い深い雪の中で

鮎太と祖母りょうの二人だけの土蔵の中の生活に、冴子という十九歳の少女が突然やって来て、同居するようになったのは、鮎太が十三になった春であった。

冴子という名前は、それまでに祖母の口から度々聞いていたが、鮎太が彼女の姿を見たのは、その時が初めてであった。

鮎太はなんとなく不可ないものが、静穏な祖母と自分の二人だけの生活を攪乱しにやって来たような気がした。そうした冴子への印象は、彼女の初対面の時の印象から来たものか、冴子という少女に対する村人の口から出る噂がそうした余り香しくないもので、それがいつとはなしに、鮎太の耳に入ってきたことに依るのか、それははっきりしなかった。あるいはその両方であったか知れない。

その日、鮎太が学校から帰って来ると、屋敷と小川で境して、屋敷より一段高くなっている田圃の畔道を両肘を張るようにして、ハーモニカを吹いて歩いている一人の少女の姿が眼に入った。少女と言っても鮎太よりずっと年長である。

村では見掛けない娘であった。薄ら寒い春の風におかっぱの髪を背後に飛ばせ、背後で大きく結んでいる黄色い兵児帯の色が、鮎太の眼には印象的であった。

鮎太も畔道を歩いて来たが、その自分とはずっと年長の少女と正面からぶつかるのを避けて、畔道の途中から小川を越えて、土蔵の横手の屋敷内へと飛び降りた。

屋敷内へ飛び降りると、地面が低くなっているため、鮎太の視野から少女の姿は消えた。鮎太は教科書の入っている風呂敷包みを地面へ置くと、傍の柿の木に攀じ登ってみた。少女は相変らずハーモニカを吹きながら段々畠の畔道を歩いていた。

鮎太がその少女を見守っているうちに、彼女は次第にこちらに近寄って来たが、柿の木に登っている鮎太の姿を眼に留めると、視点を据えたような見入り方で、じいっと鮎太の方を見た。その黒い大きい眼が鮎太を驚かせた。一体この少女は何者だろうかと思った。

もしかしたら、冴子かも知れない、鮎太はふとそう思った。

冴子という半島の突端の港町の女学校へ行っている少女が祖母の身内にあり、その少女の余り香しくない評判は、この村から同じ女学校へ通っている二、三人の娘たちに依って、この村へ伝えられていた。

鮎太は冴子という年長の、祖母の身内だという少女を、何となく美貌の少女として想像していた。彼女に関する噂の性質からすると、彼女はどうしても美貌でなければならぬようであった。

鮎太は柿の木から降りると、土蔵の中へ駈け込んだ。あのように美しい少女は、冴子でなけれ

ばならぬと思ったし、あのような不良は（鮎太にはハーモニカを吹いている少女が、そう見えた）、冴子以外にはないだろうと思った。

薄暗い板敷の横手の階段を上がって行くと、祖母の姿は見えなかったが、見慣れない鞄が一つ、鉄の棒のはまっている北側の小さい窓の傍の畳の上に置かれてあった。鮎太はやはり冴子がやって来たのだと思った。

鮎太は幾らか興奮していた。二階から降りると、直ぐ部落の子供たちの集り場所になっている青年集会所の前へ出掛けて行った。

鮎太はそこで、他の子供たちと、鉄棒にぶら下がったり、角力を取ったりして、夕方までの時間を消したが、時々、心の中で「冴子が来た！　冴子が来た！」と思った。が、誰にもまだそのことは口外しなかった。

そして、平生より遅く、春の日がすっかり暮れて、街道の両側にある家々に燈が入ってから、鮎太は家へ帰って行った。

階段を上がって行くと、冴子は祖母と夕食の膳に向かおうとしていた。

「これが坊!?　思ったよりましな子じゃあないの！」

そんなことを、冴子は初めて彼女の前に出た鮎太を見て、祖母に言った。明らかに敵意のこもった言葉であった。

「幾つ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「十三だ」
「ふん」と、十三であるという事さえが、彼女にとっては腹に据えかねる事のようであった。
「みんなあんたをちやほやするが、冴子もそうだと思うと当てが違ってよ」
そう言って、冴子は村では珍しい額で切り揃えたおかっぱの髪の下で、ちょっと怖い眼をして見せ、それから今度は優しく笑った。
鮎太は、そうした冴子に半ば見惚れていた。村の娘の誰よりも色が白く、眼は大きく澄んでおり、表情は見るからに活き活きとしていた。
祖母のおりょうは、そんな冴子の毒のある言い方に気付いていなかった。五、六年前から、耳が遠くなっていて、鮎太は祖母と話をする時は、いつも口を彼女の耳もとに持って行って、大きい声を出さなければならなかった。
鮎太は、毎日の日課の一つであったが、祖母の酒を一合買うために、平生より少し違うむっつりとした表情で五合瓶を持って家を出て行った。

冴子の言うように、鮎太は村人から、他の子供たちとは区別されて「梶の坊ちゃん」と呼ばれていた。
天城の南麓の小さい幾つかの部落では、梶家は昔から代々の医家で通っており、他の農家とは格式が違うものとされていた。十三代目が鮎太の父であり、これも医者であったが、彼は村では

開業せずに、陸軍に仕官して、軍医としてもう何年も任地を転々としていた。

従って、三百年の樹齢を数えると言われる椎の老樹を玄関口に持っている梶家の大きい家屋敷は、鮎太の生れる前から天城営林署に貸してあり、そこの代々の署長官舎のようになっていた。鮎太が知っているだけでも、三代の署長の家族が入れ替り立ち替り住んでいた。

そして、その屋敷内にある土蔵だけは確保して、そこに祖母と鮎太が住んでいる。

祖母おりょうは、村人の間ではひどく評判が悪かった。と言うのは、もともと彼女は梶家の人ではなく、梶家の先代の玄久の妾であったが、それが玄久の死後、村の収入役と結託して、戸籍を書き替えて、玄久の後妻という形で梶家へ入り込んでしまったからである。

従って、鮎太の両親にとっては、おりょうは戸籍上では義母になっていたが、梶家にとっては謂わば家を乗っ取った不倶戴天の仇敵と言っていい人物であった。

祖母おりょうが、こうした事情を知っている村人からよく思われないのは、極めて当然なことであった。

おりょうが鮎太を両親の手から引き取って離さないのは、梶家の将来の跡取り息子である鮎太を自分の手許に置くことに依って、謂ってみれば自分の生活の保証を得ているようなもので、実際にまた彼女自身そうした考えであったろうし、誰からもそう見られていた。

村人は、鮎太のことは「梶の坊ちゃん」と呼んでいたが、おりょうのことは、田舎者の依怙地から、おりょうさんとか、おりょう婆さんとか呼んで、多少の軽蔑と憎悪をその中にこめること

を忘れなかった。

しかし、鮎太は六歳の時からこのおりょう婆さんに引き取られていたので、すっかりこの戸籍上の祖母になついていたし、祖母もまた、鮎太に親身の愛情を感じていた。誰に判らなくても鮎太にはそれが判っていた。

毎月、都会の両親から、二人の生活費が送り届けられた。おりょう婆さんはその生活費を切り詰めて、自分の酒代と、それから自分にとっては唯一の血縁者である、半島の突端の港町で飲食店を開いている妹のもとに送る幾らかの金を捻出していた。その金は妹の一人娘である冴子をその町の女学校に通わせる学費であった。おりょう婆さんは、その姪の学費を、毎月郵便局から六里隔たった港町へ送金していたので、この事は村では誰一人知らないものはなく、これが村に於けるおりょう婆さんの悪評をより決定的なものにしていた。

そうしたおりょう婆さんに関する風評は、何となく、子供の鮎太の耳にも入っていたが、どうして村人が祖母のことを悪く言うのか、その理由はよくは納得行かなかった。

「すっかり坊は人質に取られて、喰い物にされとる！」

鮎太の身に集る村人の眼は、彼が両親から離れているという事も手伝って、常に同情的であった。

「自分が酒喰らうくらいなら、大切な坊にうまいものを喰わせればいいのに！」

そんな声も耳にはいった。

しかし、鮎太は、別に生活に不満はなかった。他人の眼にはどう映ろうと、結構祖母に可愛がられて育っていた。何年も祖母の皺くちゃな両脚に挾まれて寝ていたし、夕食の時は、祖母から彼女が若い時祖父と共に行ったという日光や、身延山や、それから京大阪の町の話などを聞いた。そんな話をする時の祖母の眼が鮎太は好きだった。そして他処からの貰いものがあると、祖母は自分ではそれを食べないで、鮎太に食べさせた。そして、村の子供たちの名はみんな呼び棄てにしたが、鮎太のことは、「坊！　坊！」と呼んでいた。

鮎太にとっては、詰まるところ、祖母はいい祖母以外の何ものでもなかった。喰いものにされてもいなければ、人質にされている気持もなかった。離れている両親に対する思慕は少しも涌かず、父や母や弟妹のいる遠い都会の家は、夏休みのある期間だけ帰らなければならぬ固苦しい窮屈な場所であるに過ぎなかった。

祖母は冴子の学費を負担して、自分の身内へ肩身広い思いをしているわけだが、それでも村人の思惑を考えてか、冴子を自分のところへ呼ぶことはなかった。しかし、毎年夏休みに、村人の誰かを頼んで鮎太を都会の両親の許に送り（これは鮎太の両親からの要請に依るものであった）、自分一人になると、自分は自分の出生の地であり、何人かの僅かな肉親の者が住んでいる半島の突端の港町へ馬車に乗り、山を越えて出かけて行った。つまり、鮎太も祖母のおりょうも、毎年夏になると、別々にそれぞれ肉親のいる場所へ里帰りをするという恰好であった。

だから、勿論、おりょう婆さんは自分の唯一人のお俠んな姪を部落へは呼ばなかったが、彼女

とは毎年のように顔を合わせているわけであった。

鮎太は、祖母が鮎太と同じように、自分が学費を出している一人の姪を可愛がっていることを、彼女の平生の言葉の端し端しから知っていた。

鮎太が学校で友達にいじめられたりすると、祖母は、躰を二つに折り曲げて、地面を嘗めるような恰好で、手を腰の背後で振りながら、学校の校庭へ姿を現わした。鮎太は教室の窓からそうした祖母の姿を見ると、絶望的な気持になった。鮎太が祖母について嫌なことはこの事だけだった。

「やい、どこの家の子じゃ。家の坊をいじめたのは。先生か何か知らぬが、どこの馬の骨か判らぬ他国者めが！　大体お前さんが悪い！」

祖母は窓の下から長いこと喚いて教師に毒づいた。これは鮎太の成績が一つだけ下がっても同じことだった。

これと同じように、冴子の悪口が彼女の耳に入っても彼女は、千里の道を遠しとせずに出掛けて行った。

「わしの姪を一度でも見たことあるかや。ろくでなしのおのが娘の言葉を真に受けくさって！」

そんな時、鮎太は祖母から少し離れた所で、祖母の毒舌の終るのを、子供心に孤独な気持で待っていた。大抵の場合相手は農家だったので、囲炉裏の薪の焔の光で、土間に立っている祖母の顔の半面は、鮎太には堪まらなく醜く見えた。

そして当の問題になっている自分よりは年長の、未知の少女の顔が、その反動か、鮎太の眼には奇妙に美しく浮き上がって見えて来るのであった。

鮎太は、冴子が間もなく、自分と祖母の二人の生活から脱け出して行くだろうと思っていた。それが望ましくもあり、また望ましくないものにも思えた。自分と祖母の二人だけの静穏な土蔵の中の生活が冴子という闖入者に依って、乱される不安もあったし、一方では反対に、単調な自分たちの生活に突然飛び込んで来た、一匹の華やかな色彩の蛾のようなものを失いたくない気持も強かった。

冴子が初め鮎太に会った時、鮎太に邪慳な言葉を浴せたのは、冴子が梶家に対して、よからぬ感情を持っているためで、勿論それは、彼女の伯母を梶家の犠牲者と思い込んでいるところから来ていた。そして永年の、梶家に対して自分たち一族の肩身の狭さに対する反撥は、冴子の心の中では相当強いものらしかった。

「おばあちゃんは一生可哀そうだったのよ。お妾さんにさせられ、可哀そうだったと思わない？そして年取ったら、こんな薄暗い蔵の中に押し込められてさ。さあ、可哀そうと言ってごらん、言えるでしょう」

冴子はある夜、隣の床の中で、くるりと鮎太の方へ顔を向けて言った。

「可哀そうだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton